

Q：中央構造線についてもっと詳しく知りたい。

A：日本最大規模の活断層で西南日本を内帯と外帯に二分している世界的にみても有数な活断層です。

中央破碎帯であるフォッサマグナに接してから中部地方の山岳地帯を経て紀伊半島を横断しているが、活動するのは紀伊半島の中部から西の部分で、和歌山県と大阪府の境になる和泉山地の南側に沿った部分では、1000年に毎に5m程の活発な動きが観測されるが、大地震の記録は残っていない。

中央構造線の四国の部分も1000年毎に5m以上のズレを生ずる活発に活動する活断層で、M7.0クラスの大地震が頻繁に起きているはずだが、歴史資料からは見付かっていない。だがトレンチ掘削調査では7～8世紀以降に大きく動いたとみられる得られており、1596年9月5日、有馬 - 高槻構造線の活断層で大地震が発生、推定M7.5 秀吉の晩年の頃で、京都の三条から伏見の被害が甚大で、伏見城の天守閣が崩壊、城内で500余の圧死者があったという。

その他 堺、高野山、大阪という広範囲で多数の犠牲者をだした。

この有馬 - 高槻構造線の活断層大地震の前日である1596年9月4日には、中央構造線の九州側の豊後でM7.0の大地震があり、大津波が発生して別府湾岸沿いの農漁村が壊滅した。

古文書によると16世紀から17世紀にかけて大地震が幾度か発生したと記録されているが、詳しくは解らない。ただトレンチ掘削調査によると断層が動いていることは確かで、大地震が発生していることが推定される。

記録としては、1586年 畿内・東海・東山・北陸諸道を揺るがす大地震が各地で頻発したと記されており、1605年にはM8.0クラスの巨大地震、ほぼ同時期に東海沖でも巨大地震があった。

中央構造線の四国・徳島県の部分で有馬 - 高槻断層と連動している可能性があり、また九州の西の部分と連動している可能性がある。

九州の中央構造線の延長線は西へ延びているが、大分から阿蘇山を経て雲仙岳に至る地域では南北に伸びる力が働いており、正断層型の地震が多い地域が別府 - 島原地溝帯である。

この地溝帯の南に位置する熊本県は日奈久断層があり、北東 - 南西方向の長い活断層に沿って、中小規模の地震は現在でも度々起きている。

中央構造線全体では17世紀以降大地震が起きていないが、活断層だからその活動は継続しており、次の地震が心配されている。

